
へそ曲がり笑子さんッ！

ざしきのわらし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へそ曲がり笑子さんッ！

【Nコード】

N2552C

【作者名】

ざしきのわらし

【あらすじ】

私、“皆心笑子”は（自称）天才カウンセラー。私に答えられない相談なんてこの世にないッ！　なんて、思っていたら……

こんにちは。

私は（自称）天才カウンセラー……

「皆心 笑子」よッ！

え？何その“ありきたりだなあ”って言う目は。

これは私が丸三日間寝ずに（昼寝は含まない）考えた、素晴らしいペンネームなのよ？

まあそんなペンネーム（関係ない）と、実力（自称）のおかげで児童電話相談室『一人で悩まず117』が守られている訳で。

とりあえず語尾の番号が“天気予報”なのは軽く突っ込んで頂戴。じゃあ本来は守秘義務で相談者の話はしちやいけないんだけど、今日は特別。

次から語る話は、つい1・99999……以下略分前の出来事でした。

局内に鳴り響く、一本の電話。

とりあえず他の人も忙しそうだったからここは私が出たわ。

「ハイ。こちら『一人で悩むな117相談室』です。ついでに私、“皆心 笑子”なのに皆の泣き顔大好きな美人カウンセラーであります」

『あ、あの……』

軽く流したわね、こいつ。

声は男の子。まだ声変わりしてないみたい。

『相談って、なんでもいいんですか？』

この言葉に私はくすつと笑う。
なんて愚問なのかしら。

「ええ、もちろん。イジメ被害の相談からイジメの仕方まで。勉強の悩み事から先生からテストの答案用紙を盗むまで。さらに学校の怪談を上手く使った自己防衛や……」

『じゃ、じゃあ……さっそく』

まだ話終わってないんだけど。
でも良いわ。天才カウンセラーは心が広いのよッ！

『あの、実は僕……今お金が無くて』

………は？

何その不景気な世間なら誰もが悩みそうな相談は。
でも男の子は続ける。

『友達も、家族も言ったのに力を貸してくれなくて』

「ふうん。でも周りに言っただけなら良いじゃない。んで皆はなんて？」

『“お前の手でやるから意味がある”って』

なんじゃそら。

自分の力で何とかしろって意味？

てか小学生（声的）に、金の問題はどうしようも無いと思っけど。

『でも、僕にはどうしたら良いのか……分からなくて』

「今までの会話を聞いてるとまさにフリーターの門出ね」

『だから、その。“皆殺し 傷子”さんにご相談を……』

「私は“皆心 笑子”よッ！嫌がらせか!？」

『“人”を殺すべきか、殺さぬべきか』

一瞬の間があく。

え。何それ……。

暫く言葉を失っていた私だけど、ハッ和我に帰る。

「い、今。なんて……」

『だから、“人”を殺すべきか、殺さぬべきか。です』

き、聞き間違いがじゃなかったあああ！

「や、止めるんだッ林！君の未来はまだ消えてないぞッ」

って、何言ってるの私!？

林って誰　！？

てか、火サスの自殺を止める人みたいな口調になつとるッ

「き、君。ほほほ本気……？」

『本気というか勇気が無くて。僕には、その人の頭をかなづちでかち割る一歩がなかなか……』

小学生にしで火サスの裏主人公かよッ！

てか、そんな勇気は要らんよ。

絶対要らんよ。

『偶然を装って、窓から突き落とすか。はたまた誰かに依頼するか……どっちがいいでしょう？』

しかも殺し屋にまで手を出すつもりかあ　！？

まだ十代じゃにして未来を捨てるの早くないかあ　！？

ここは天才カウンセラー“皆心　笑子”の実力で止めなくちゃッッ！

「待ちなさい。殺し屋なんて頼むもんじゃないわ……。お、お金は凄いかかるし。下手すると口封じとか言って殺されるわよ』

そして私は止める所が違あああう！

私の馬鹿あッ。

『そ、そうなんですかッ！』

何気なく食い付く小学生。

私も小学生の頃は良く陰湿なイジメはしてたけど……さすがに殺し屋までは。

「で、でも、君がそんな事したら大切な物を失うわ」

うわぁ。久しぶりにカウンセラーらしい事言った……。
いつも皆をけなして楽しんでたからな。

「例えば、権力とか、地位とか、財産とか」

すみません。

私には愛とか家族とか言う口はなかった事を忘れていたわ。
でも小学生は、少し黙り込む。

『財産は、これ以上失いたくないです。……でも、その人を殺してお金を手に入れないと。僕、お姉ちゃんに喜んで貰えない』

「えっ」

『僕、お姉ちゃんの喜ぶ顔が見たいんだ……』

喜ぶ顔が見たい、ですって？

「さっさと……それ、言いなさいよ」

私は少し声を荒げた。

何か知らんが怒っていた。

カルシウム不足？

「あんたの姉さんがどんな人かも知らないけどねッ人を殺して得たお金が欲しいなんて思う奴なんていると思ってるのか！そんな事するくらいならこつこつ働いて、どんなに時間がかかっても自分を信じなさいッ！それくらい、出来るでしょ……」

私格好よくねッ！

自画自賛しちまうぜ。

小学生は暫く黙り、やがて小さく『うん』と言った。あの怒号が撃沈してたら天才カウンセラーとして失格よね。

『そつかあ。そうだね……そうだよね』

「そうよッ。あんたはまだ若いんだからもつと良い方法がきつと見つかるわ」

『うん。僕、お姉ちゃんにプレゼント買おうって思ったけど遊びに言ってくるねッ』

「うん。お金なんかよりも逢って話した方が何倍も大切なんだから。ゆっくり話してらっしゃい」

何か凄い充実感だわ。

こうして“皆心 笑子”は、一つの命を救った訳で……

『ありがとう。“皆殺し 傷子”さん！』

「私は“皆心 笑子”だっつってんだろがあああッッッ！」

つ、疲れたわ……。

今までもいろいろな相談を受けて来たけど、まさか殺しの相談なんて。

まあ天才カウンセラー“皆心 笑子”のおかげで、殺人事件は防げたし、一軒落着かしら。
早く帰りたいよお。

「……あれ」

アパートの前まで辿り着いた私の足が止まる。

階段の所 段差に腰を掛けてじっとゲームをしている小さな人影がそこにはあった。

まさに小学生くらいで、背中にはリュックを背負っている。

私は動けない。

何か知らないけど動けなかった。

「じゅん、や……？」

やつの事で私は喉から声を振り絞る。

“じゅんや”と呼ばれた小学生は、聴こえるはずのない声を受け取り、ムチの如く頭を上げる。

「お姉ちゃんッ」

“じゅんや”は、そう私を呼んだ。

そしてゲームを投げ飛ばし、こちらへ駆けて来る。

分らない。

何故彼がここにいるのか。

「お姉ちゃん”お帰りなさいッお仕事疲れたあ？」

「そ、そうじゃなくて……」

何であんたがここにいるのよ。

私は田舎から都会へ一人で出てきたの。
それなのに何で、何で……。

「今日はお姉ちゃんのお誕生日だよッ」

「えっ」

「だから僕、プレゼント買って送ろうと思ったけど……カウンセラーの人が“逢って話した方が何倍も良い”って言ってたから」

「まさか……」

私は思わずハッとした。

一年以上も逢ってないせいか弟の声さも忘れていたのだ。

現に目の前で話すじゅんやの声と、あの昼間の小学生の声は見事に一致している。

「で、でもじゅんや。あんた誰かを殺すとか……」

そうよ。

これは、流しちゃ行けない疑問よ。

「 あっそうか。お姉ちゃんも“皆殺し 傷子”さんと一緒に働いているんだよねッ」

“皆心 笑子”です。
いい加減にしろや。

「うん。貯金箱を割る、勇気が無くて……」

ほんのり頬を赤く染める弟。

え。貯金箱？

「前に夏休みの貯金箱コンクールで銀賞を取った時、景品で“会長モデルとした貯金箱”を貰って使ってたんだけど……。今回のお誕生日でお金を取りだそうと思ったなら陶器製で割るしか取り出せなくて」

え、じゃあなんすか。

その会長モデルという“人型の貯金箱”を割る為に電話して、私が勝手に誤解して、私の弟に私の所へ行けとアドバイス ……

ああもうッ！

何か分からんけど頭痛くなってきた。

てか、貯金箱の会長死ねッ！

「……お姉ちゃん、迷惑だった？いきなり来て、ごめんね」

じゅんやが不安そうに私を見てきた。
別に迷惑じゃない。

だって。この一年ずっと一人だった。
だから。むしろ、私は……

「んな、訳ないじゃない……。さあ、早く部屋に入ってご飯食べようっか？」

「わぁいッ僕ケーキ食べるう！」

「はいはい」

私はじゅんやの背中を押し、顔を無理矢理上に上げる。

熱い目頭から涙が溢れないように。

不覚にも“カウンセラー・皆心 笑子”に感謝してしまった瞬間だった。確かに私は不器用で、飾りっ気のあるような上辺の言葉で相手を慰められないかも知れない。

だけど私はこの仕事を続けようと思う。

少しでもこの感情を皆に分ける為に。

ずっと。

ずっと……。

「あ、そうそう。“皆殺し 傷子”さんにお礼言っておいてえ！」

やっぱ、止めた。

（後書き）

ご愛読、ありがとうございます。

ちなみにすべて真相を知った上で、“じゅんや”の電話相談を見る
と面白いかも。

では感想お待ちしております……。

ぞし

きのわらし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2552c/>

へそ曲がり笑子さんッ！

2010年10月9日02時30分発行